

文藝春秋新社

いなか
のおくりもの

〈著者略歴〉

1929年東京生れ。本名 堀内秀。慶応大学 医学部卒業後 53—54 年フランス留学。現在慶応病院神経科所屬。『文芸首都』同人。現住所・東京都新宿区新小川町2—10 江戸川アパート60号

パパのおくりもの

著者◎・なだ いなだ

発行者・上 林 吾 郎

発行所・文藝春秋新社

東京都中央区銀座西8ノ4

図書印刷・矢嶋製本・文京紙器

Printed in Japan

定価・ 350 円

昭和40年1月10日 第1刷発行

昭和40年6月1日 第 8 刷

も
く
じ

パパのおくりもの・7

教育について・23

お前たちのママ・36

悪徳について・51

かずかずの偶然について・61

十年ぶりのバリ・69

ラ・マンブロールでの夢想・78

大学都市ふたたび・84

ケネデイの暗殺・92

ためいき・100

平和と英雄との関係・108

裏町にて・ 114

日本人のこと・ 123

やぶけるという言葉・ 132

スペインとポルトガルへの旅・ 142

イギリスにて・ 152

ロンドンの六月・ 164

ブラーハでの一カ月。共産主義と無関係なことごと・ 174

コペンハーゲンから。人魚の表情・ 200

フィンランドの自然と人間・ 218

パパのゆうれい・ 233

カット・水野良太郎

パ
パ
の
お
く
り
も
の

A la coupable

パパのおくりもの



パパは今朝、寝どこの中ですばらしいことを思いついた。それはお前たち子供におくりものをするのだ。すばらしいといっても、おくりものがすばらしいのではない。あわててはいけない。つまりヨットでもモーターボートでもスポーツカーなどでは更にならない。そんなものは（もちろんそんなものがパパに買えたらの話であるが）お前たちにこのパパがやる筈がない。すばらしいというのは、このおくりものに、パパは一円もかけないですむということだ。こういうとパパは大変ケチンボのよういきこえるが、実はパパがケ

チなのではなく、日本政府がケチなのである。パパは国立の精神病院のお医者さんであるからだ。大学を出て医学博士であるパパの給料は、ロンドンの地下鉄の切符切りよりも低いのである。

パパの病院は久里浜にある。そして、そこにパパの官舎がある。小さな家だが、海のそばなのでお前たちもよくそこに連れて行く。その一部屋は雨もりがして、畳からいつも茸が生えている。ケチな日本政府はそれを修理してくれないのである。それで、お前たちは、パパの官舎に来ると、「パパ、又茸はえた」とまっ先にその部屋を見に行く。それだけならよいが、お前たちは東京の家に帰って来ると、「久里浜のパパの家には、茸が生えてるんだぞう。畳からだぞう」と近所の人たちにいばって歩くのである。どうしてパパがこの屋根をなおさぬかと言えば、なおすと、その部屋がなおいっそう雨がもるばかりか、別の部屋まで雨もりがはじまるおそれがあるからで、賢明なるパパはそんなつまらぬことを試みないのである。

それでパパの考えというのは、お前たち子供に、これから折をみて、お前たちのパパやママやお前たちの子供時代の出来事、お前たち自身の言ったことやしでかしたことで、大きくなるまでに忘れてしまうようなことがらを書きとめておいて、それをおくりものにしようと思うのである。おくりものというのもさまざまで、ママが三年前にパパの誕生日におくってくれたカミソリは、正直のところけしからぬものであった。今でもパパは毎日それでヒゲを剃っているが、このいまいましいおくりもののせいで、パパは毎日ヒゲを剃らねばならなくなったし、それどころかアゴや頬から何度大切な血をながさせられたことであろう。それにくらべれば、この一円も

かからぬインクのしみのついた紙くずは、まるでからっぽの箱のようであるが、全く安全であることを保証できる。

お前たち、ユキにミト、それから間もなく生まれて来るチカ、チカお前はまだ生まれていないので女だか男だかわからぬが、それがパパの三人の子供である。チカ、お前はまだ生まれていない。それで浅はかな人間は名前をつけるのに困るだろうと、人のことなどに余計な心配をするかも知れぬが、パパは少しも困ったりなどしない。誓ってもいいが、お前はたぶん、そして間違いない男か女かのどちらかであろう。それであるから、パパは、男であっても女であっても、どちらでもかまわぬような名前をもうきめてしまった。お前の名前は千夏ということにする。そしてお産の時に少々雷が鳴り（というのは、お前が初夏の頃に生まれることになっている）あるいは地震があつても（地震は季節をえらぶことはないから）この名前は変えない。男の名前としては、ちょっとばかり風変りのように聞え、パパもその点、とくに風変りでないと言える自信があるわけではないが、よく考えると千春という男の子も千秋という男の子もあるのだから、千夏が男の子の名前に悪い筈がない。それに春よりも秋よりもパパは夏が好きなのだ。千の夏、わるくはない。少し暑くるしそだが。それにパパはあまり欲ばりでないから千で我慢した。十夏や百夏では名前にならぬし、万夏などとよくばつてみても、せいぜいパカと読みちがえられるのが関の山であろうことをちゃんとおもんばかったし、千一夏などというおつりのきそうな数字も嫌った。

ともかく、ものぐさのパパにこれ以上の知恵は浮ばない。もし氣に入らなければ、女は下に子をつけるという便利なてがあるし、男だったら、シだとかオだとか勝手に自分でくつつけるがよろしい。だが、ことわっておくが、パパのつける名前はチカまでである。お前の二人の姉がユキにミトであるから、詩人のパパにとって三番目の子供に二音節以外の名前など主義としてできない。ともかくも、ユキにミトにチカ。お前たちが十五歳か二十歳ぐらいになったら、このパパの書いておく、お前たちの思い出や、お前たちを前にしてこぼしたパパの愚痴や、その他もろもろの覚えがきを読むことができるだろう。その頃になったら、お前たちが今よりも、もっと素直になつて、からっぽのお菓子箱を見ても、そこに空気がいっぱい入っていることに氣付くことができるだろう。パパはそうなつてもらいたいものだと思う。

ユ　キ

お前の名前は由希と書く。ユキという名前は多くても、こんなふうに書くのは世の中にザラにはないらしい。といっても、それに特別の意味があるわけではない。パパは仮名論者でもあるいは依怙地な漢字論者でもサラサラない。「ゆき」と仮名で書くのも何かつまらぬし、月雪花の雪の字をあてたりすると、世の中には頼みもせぬのにそそっかしく生まれて来た人間がウヨウヨといて、雪という女は雪のように色白でないとおかしいと思つたりする。そもそも生まれてすぐ名

前をつけるので、その頃はどんな赤ん坊でも真赤な顔をしていて、その一人一人が将来雪のように白くなるか、あるいは夏休に海岸に行つて日に焼けて、アフリカ人が縁の下から現われたような顔をして帰つて来るかなどわかつてしまう筈がないではないか。お前がそんなことでわずらしい思いをしてもと思つて、今のような名前にした。

お前は今、三歳と七ヵ月になる。体はどうも標準よりも大きい。この間もバスの車掌がなんとしても六歳以上だと言つて、子供の料金をパパからまぎあげた。はなはだけしからんことであるが、パパは決して弱くはないのだけれども、そこで争うようなことをしなかつた。こういうのを金持ケンカせずというのだ。というのは、パパは子供の時体が小さかつたので、中学にあがつてもしばらくの間子供切符で乗つていて、計算すると、大分バスや電車にかりがあり、このくらいのこと、赤字になるおそれはあまりないからだ。しかしこれは、あまりおおびらに言うべきことではない。ともかく、お前が三つ半で六歳の料金を取られても、八歳でまだ金もはらわぬ子供もあることだから、世の中はうまく調和して行くのである。これはパパの千に余る世の中に生きて得た悟りの一つである。

それにどういふことか、自分の子供が年よりも大きく見られたりすると、親は不思議と満足な気持になる。三つぐらいの子供を見たら四つですか、と言うに限る。いいえ、うちの子供はまだ三つですよ、と相手が答えてもしたら、そしてもし風の強い日でなかつたら、目玉をまるくして驚いてみせることだ。間違つてはいけない。まんまるだ。三角ではない。年ばかりではない、目

方にしても同じである。ユキ、お前は生まれた時、ほぼ一貫目あった。だが生まれる前は小さい赤ん坊であると思われていたし、医者も絶対小さいと太鼓判を押してにくれたのである。そもそも人間の気持とは不思議とわからぬもので、生まれた時の目方など、どうでもいいようなものだが、やはり大きい方が親は誇らしい気持になるものらしい。食べる肉なら百匁でも多い方がいいことはわかるが、生まれる子供の場合は母親の苦しみをますくらしいものだ。それでも、パパの友人の小説家でも批評家でもあり、日頃は仲間のあいだで聡明をもつてなる田畑彦は、パパが「おれの娘は生まれた時、一貫目あった」と言うとき、「おれの娘は一貫三百あった」と答えた。そして一貫三百という、全くもう、どうでもいいような目方を口にする時、彼は何ともはや幸福きわまりないような顔をしたのである。

お前は四年前の九月の最後の日の午後、夕刻近くなつて生まれた。少々難産であつて時間がかかり、同時に産室に入つて早く生まれた子供があつたが、そちらの係りの医者が、「こつちの方が先に生まれるぞ」と得意気に叫ぶと、お前の係りの若い産婆は、「何言つてるの、ポートレースじゃあるまいし、頭ぐらい先に出たつてなによ」と立派に、だが少しばかり口惜しそうにはあるが言い返したのであつた。

お前がまだママのおなかに入っている頃、パパの友人の北杜夫という小説家と窪田般彌という詩人がパパに言った。もし女の子が生まれたら心配におよばぬ、嫁にもらつてやると。二人は必要な場合は決闘して、どちらがお前を嫁にもらうかをきめると言っていた。二人はその頃、大分

年をとりはじめていたが、まだ立派な独身であった。二人は将棋で賭けたこともあったが、その時の様子では詩人の方が分が有るようだった。お前が生まれた時、感心に小説家の方がすぐお前を見にやって来た。だが感心なのはそれまでであった。ともかく、お前は三十時間の悪戦苦闘の末に、やっとこの世に姿を見せたばかりであり、だからお見合いなどするには、どう考えてみても適当でなかったのだ。親のパパが見てもお前の頭は全くとてつもなく、そして妙な方向に細長かった。小説家は白いネルの産着を着て、にわとりのとさかのように赤いお前を、立ったままで、手を出すどころか後に組んで一べつした。そして何とも妙な顔をして「タハッ」とロボットでも出すまいというような声を出すと「これが、そのあれか」と小説家にあるまじき非常に不明確な言葉を吐き、けしからんことには将来妻となるかもしれぬお前を抱いてみようとしなかったのである。それでも帰る時に、「まあ、安心しとれ、二度目に結婚する時には必ずもらってやるから」とパパを慰めるような口調で言った。

詩人の方が、もっとけしからぬ態度を示した。お前の生まれたしらせを受けるやいなや、全く電撃的な速さで結婚してしまったのである。

さいわいなことには、お前はその時小説家の顔を見なかった。お前の眼はまだはれていて開くことができなかったからだ。それでお前は大きくなってその小説家に逢うことがあったら、私はあの時、あなたなどに目もくれてやらなかったのだわ、と言っても、決してうそにはならないだろう。

お前の名前もそれほどザラにあるものでないことは確かだ。だが、この世の中にお前と同じ名前の人間が一人はいる。というのはパパの知っている、ある可愛らしくなくもない女の子がやはりミトという名で、何をかくそうパパはその名前をそっくり盗んでしまったのである。ミト、かくして、パパはお前のために何とすでに盗みまで働いてしまったのである。だが、世の中で何一つ悪事を働いたことのない人間など、おそらく生きてはいないだろう。これは断言してもよいが、定期券を持って一度もキセルをしなかった者など、刑務所に行かなくとも精神病院に行くにきまっているし、コーヒー店で灰皿を失敬したことのない男などは、きっと子供を作ることでもできないような意気地ない男にちがいない。ともかく、小説の題など平気で盗んでしまう男がいる時代なのであるから、子供の名前ぐらい盗んでも、それはいたしかたのない時代なのである。

ことわっておくが、パパはそのくだんの女の子が好きだったのではなく、その女の子の名前が好きだっただけだ。しかし女はそうしたデリケートな男の気持などわかるほど近視眼でなくはないので、お前の名前がきまるまでパパとママの間にひと悶着なしにはすまされなかったであつた。お前の名前は美都と書く。

ミト。お前はあと一ヵ月でちょうど二回目の誕生日を迎えることになっている。お前は今、何